



尻別川の未来を考える オビラメの会

OBIRAME RESTORATION GROUP
NEWSLETTER Feb. 2012

37

イトウと釣りとモノ作り 写真と文 藤原弘昭

子育てが一段落し、本格的にイトウ釣りを再開した2005年のシーズンオフからルアー制作を始めた。市販ルアーは高額で、釣行時のルアーロストが金銭的・精神的に大きなダメージとなってきたからである。

投資額は、エアブラシ、コンプレッサー、換気扇、ルーターなどの道具類と、バルサ、針金、塗料などの材料費、締めて5万円程度。市販ルアー1個の値段を1000円とすると、製作数50個を越えたところからコスト縮減効果を発揮する計算になる。

しかし最初の2年間は、使用に耐え得るルアーを作ることがなかなかできず、100個作っても5個くらいしか使えない、といった具合であった。計算通りにはいかないのが人生である。

現在は過去に作製した中で、バランスが良く自分のフィーリングに合ったものを数種類選び、少しずつバージョンアップさせながら、オリジナルルアーを使ったイトウ釣りを楽しんでいる。いくつかご紹介しよう。

Fujiヤマメ8cm(写真左下)

中小河川のイトウをターゲットとし、ミ

ノタイプでは一番活躍してくれる。6月は上流から下流までどこにでもイトウがいて活性が高く、これ1本で数釣りができる。なお、同じタイプでフローティング、サスペンド、シンキングなど状況に合わせて使い分けている。

カラーリングを変えて、ヤマメ、ウグイ、ドジョウ、ヤツメ、ワカサギなど、いろいろなパターンを作製したが、現在はほとんどヤマメパターンしか使わない。スレた魚を釣るためにはカラーチェンジ、パターンチェンジが有効なことは理解しているが、私としては、見た目がいいもの、信じて使い続けられるもの、水中の動きが見やすいものが中心となり、いつも同じものを多用してしまう。それがヤマメパターンであり、実際良く釣れる。

スピナベFujiSP(写真左上)

これも実績抜群の、大物イトウ狙い専用ルアーである。昔、リッパフィッシュというルアーがあったのだが、その独特のフォルムに直感を得てデザインした。ブレードは真鍮板を叩いて作り、フックをオフセットのワームフックにすることで、様々なワームをト

レーラーとして交換して楽しめる。ミノーなどにスレたときは特に有効である。市販のスピナーを使ってフックを交換すれば、ほぼ同じ仕様となるので是非試していただきたい。

イトウは人生の一部

釣りから始まって保護活動にも携わり、イラストやフギア制作などを通じて、私はますますイトウの魅力に引きずり込まれている。いろいろな角度からイトウを見つめ、毎日のようにイトウについて考えていると、イトウが自分の身内のように愛おしく思えてくる。

私が釣りをしている道北河川では近年、1mを超えるイトウの釣果情報が多くなっているが、これは釣り人の大半がキャッチ&リリースをするようになった結果であると確信している。まさに、釣り人がイトウの生息環境を監視するとともに、イトウを護り育ててきた成果なのである。自分がその釣り人の一人であることに誇りと生きがいを感じ、今後もイトウに関わって生涯を過ごしたいと思っている。

尻別川でも、「オビラメの会」の保護活動により個体数を回復させ、かつて草島会長や吉岡事務局長が釣り上げたような大物イトウを私が釣り上げる日が必ず来ると信じている。その時が来たら胸を張って、大物イトウ狙いのルアーを尻別川に遠投してみたいものである。



続きはウェブで **オビラメの会**

イトウ保護サミットへの思い



川村 洋司

北海道立総合研究機構さげます・内水面水産試験場、オビラメの会会員

一昨年(平成22年)の春、尻別川を愛する地元釣り人によって、尻別川で約20年ぶりにイトウの天然産卵が確認され、その連絡を受けた私たち「オビラメの会」会員も感動的な場面に立ち会う荣誉に浴した。さらに昨年春には再度、そしてより多くのイトウの姿を確認し、無事な産卵を祈る多くの方々と共に喜びを共有した。これを機会に流域の方に広くイトウの存在を認識していただき、そのすばらしさを伝えるとともに、主体的にイトウの保護に関わっていただこうと、今「オビラメの会」では、流域町村を主体とした「イトウ保護サミット」を今年の夏に開催しようと計画している。

希少種と呼ばれる生物の多くは、以前からずっと希少種であったわけではない。昔はごく普通に見られて地域の人々に親しまれ、あるものは生活資材の一つとして、あるいは食料として、時にはやっかい者扱いされる存在として、地域の文化に溶け込んで生活していた生き物が多い。トキはその典型であり、植物ではサクラソウもそうだろう。タナゴの一種ミヤコタナゴも、かつて地元ではミオブタと呼ばれ、ごく普通に見られた淡水魚だった。ところがいずれも現在では絶滅したか、絶滅の危険が非常に高まっている生き物になってしまった。

今回20年ぶりに再生産が確認された尻別川に生息する巨大淡水魚のイトウもその一つである。

文化をはぐくんだ尻別イトウ

昭和40年代後期。イトウはすでに「幻の魚」と呼ばれていたにもかかわらず、尻別川では1mを超す大物の釣獲記事が釣り雑誌のカラーグラビアをたびたび飾っていて、尻別川は「巨大イトウの釣れる川」として有名であった。

「オビラメの会」の草島会長の釣り日誌には、昭和30年代には1m前後のイトウが年間100尾以上釣れ、昭和50年代の始めまではまだ40~50尾釣れていたことが記されており、昭和30年代から50年代初めまでは、まだメーター級のイトウがごく普通に釣れていたことがわかる。

その当時、イトウ釣りは大河である本流の釣り場へのアプローチが今と比較すると格段に困難であった上に、巨大化するために昔の釣り道具では容易に対象とすることができなかったから、イトウ釣りは「イトウ師」と呼ばれる一部の釣り人の独壇場であり、独特の釣り道具を発展させた一種のコミュニティーを形成していたらしい。

釣り人以外にも、産卵期に比較的小さな支流に遡上してくるイトウ親魚を狙って、ヤスを使った捕獲が試みられていたのは言うまでもない。寒村で食料が乏しく、物資の輸送手段もあまり発達していなかった当時の尻別川界限では、イトウなどの川魚が重要な新鮮食材として利用されており、大きなイト

ウは正月の新巻サケに代わるごちそうだったという。「1mクラスのイトウが米2俵に変わったことがあった」と草島会から聞かされた。

今ではほとんど目にすることもなく、多くの住民からも忘れられた存在になってしまった尻別川イトウにも、かつては地域住民との間に生活臭が色濃く漂う時期があり、流域文化を強く感じさせる時期があった。

尻別イトウのユニークさ

イトウと言うと「巨大な魚」というイメージが先行しがちだ。確かにイトウは寿命が15~16年と長く、成熟までの年数が長いので、ほかのサケ科魚類に比べると非常に大きく成長する。

しかし、現在までに得られたデータによると、現在の北海道の河川では、イトウは多くの個体が体長90cmくらいまで成長したところで寿命を迎えてしまうようで、1mを超す物はさほど多くはないらしい。筆者は長年、産卵期に道東・道北・道央のいくつかの河川で数多くのイトウ親魚を目にしてきたが、1mを超す個体は数えるほどしかいなかった。

しかし尻別川のイトウだけは例外で、成長スピードが速く、ほとんどの個体が10年あまりで1mに達する。そのうえ雌は90cm程度以上に大型化しないと成熟しない。これは他の河川の雌イトウよ

りも20~30cmほども大きい値である。

一昨年、昨年と、約20年ぶりに倶知安町内の河川で確認された遡上親魚たちも、すべて1mを超すと思われる見事な魚体のイトウばかりであった。巨大な雌が体をくねらせ、水面を大きく波立たせて産卵床を掘り、巨体を朱色に染めた雄同士が雌をめぐる水しぶきを上げて争う姿はまさに壮観で、福島倶知安町長をして「地域の宝」と言わしめたのも十分にうなずける。

尻別川のイトウはメーターオーバーが普通であり、今でもなお特別な存在であり続けている。

イトウ減少の要因を探る

イトウは他のサケマス類と同様、生まれた川に戻って産卵する「母川回帰」の習性を持っており、産卵は比較的小さな支流や本流の上流で行なわれる。

成長とともに順次下流域に降って本流の大きな淵で生活し、一部は海まで出るものもある。成長して成熟に達すると再び本流を遡上し、生まれた支流などに入り込んで産卵するが、アキアジやサクラマスのように一回の成熟産卵では死なずに複数年にわたって産卵するので、その都度上流と下流を行き来する。

このようにイトウはその生涯にわたって上流から下流まで河川流域を広く利

用して生活しており、河川全体を生息場所とする「広域生活者」である。昨今、河川環境の保全で良く問題とされる「流域の連続性」を最も必要とする魚であると言ってよい。

絶滅が心配されるほど尻別川のイトウが減ってしまったのは、この「流域の連続性」が至る所で大きく損なわれてしまったことが主な原因である。

道内でも有数の豪雪地帯を流れ、一年を通して豊富な水量を誇る尻別川流域だが、途中あちこちで寸断されてしまっている。発電用ダムが流れを遮断しているうえ、取水口と排水口の距離が離れているために、この間の流水が極端に少ない。さらに一大農業地帯として中下流域一帯が農耕地として高度に土地利用が進み、河川の直線化と床止工・頭首工などの落差工建設が進められた。その結果、イトウたちは生息場所として重要な本流の大きな淵を失い、産卵場所などへの移動経路が絶たれ、その数を次第に減らしていったと考えられる。河川改修によって釣り場へのアプローチが容易になり、釣り道具が近代化して釣獲数の相対的増加も一役買ったかもしれない。生息数の減少とともに流域住民の関心も薄れ、ごく一部の釣り人を除いてその存在が忘れ去られてしまったことが、「負の連鎖」となってさらなる生息環境の悪化を許したと思われる。

主役は流域住民

そんな尻別川も、密かにイトウ自身によって準備された、ささやかだが見事な復活劇によって、いま大きな転機を迎えている。このすばらしい自然の営みを私たちの代で絶やすことなく、子供たちにも連綿と受け継いでいきたい。尻別イトウの産卵に立ち会った方なら誰でもそう感じずにはいられないであろう。何時の日か尻別川流域の彼方此方で繰り広げられるこのすばらしい光景を想像してほしい。

今回のイトウ産卵の再確認はそんな夢を膨らませるのに十分な根拠を提供してくれた。「百聞は一見にしかず」、是非一度ご覧になってそのすばらしさを実感してもらいたい。その美しい感動を流域住民の間で共有してほしい。そして、尻別イトウを「郷土の宝物」として、「流域一貫」の象徴として、住民の心に根付かせたい――

そんな思いで「イトウ保護サミット」の開催を発想した。「希少種保護」や「生物多様性保全」という言葉を超えた、流域に生活する住民の目線からの「イトウ」をとらえ直す機会にしたい。イトウを中心に沢山の問題と多くの話題を抱えて、今回の「イトウ保護サミット」を流域住民が楽しく集う場所にできればと願っている。

尻別川のイトウのために

倶登山川落差工魚道設置工事備忘録

岩瀬 晴夫

北海道技術コンサルタント川づくり計画室室長、オビラメの会会員



1 魚道工事概要

一級河川尻別川水系の一次支川である倶登山川とその二次支川であるX川に、それぞれ4基と1基、合計5基の魚道が、北海道の「地域用水環境整備事業」で設置されました。工事期間は2008年(平成20年)から2011年(平成23年)の4カ年。魚道工事の発注・監督部署は、北海道後志総合振興局(旧後志支庁)の産業振興部農村振興課です。設置年順に並べた魚道一覧(表-1)を示します。

2 魚道設置の経緯

倶登山川水系への魚道設置は、「オビラメの会」が2004年9月に実施したイトウ稚魚放流が契機といえます。稚魚放流地点は、「オビラメの会」がIUCN再導入指針に基づいて「イトウ産卵に適している」と判定したX川です。放流稚魚は、数年かけて徐々に下流へ下りながら成魚となり、性成熟すると放

流されたところに戻って産卵することになります。しかし、途中で落差工があると遡上が阻まれますので、イトウ遡上を可能にする魚道の設置が差し迫った課題となりました。

「オビラメの会」は2005年秋、「落差工に魚道をつけて欲しい」という要望書を当時の後志支庁に提出。支庁は2006年、予算総額1億円を計上して5基の落差工に魚道を設置すると決定。「オビラメの会」や地域団体をメンバーとする魚道整備環境配慮検討が設置されて設計などについて協議を重ね、2008年3月に1号魚道が完成しました。魚道は、倶登山川に生息する遊泳魚種(イトウ・ヤマメ・アメマス・ウグイなど)を対象としたものです。筆者は「オビラメの会」会員として、河川工作物専門技術者の立場から、検討会に知見を提供しました。

落差工を含む河川全体の河川管理者は北海道、落差工施設の所有者は国の直轄である小樽開発建設部、

事業主体は支庁というように、特殊な状況であったのが倶登山川落差工です。そのような複雑な関係にも関わらず、行政部局間での調整が進み、早期着工が実現しました。

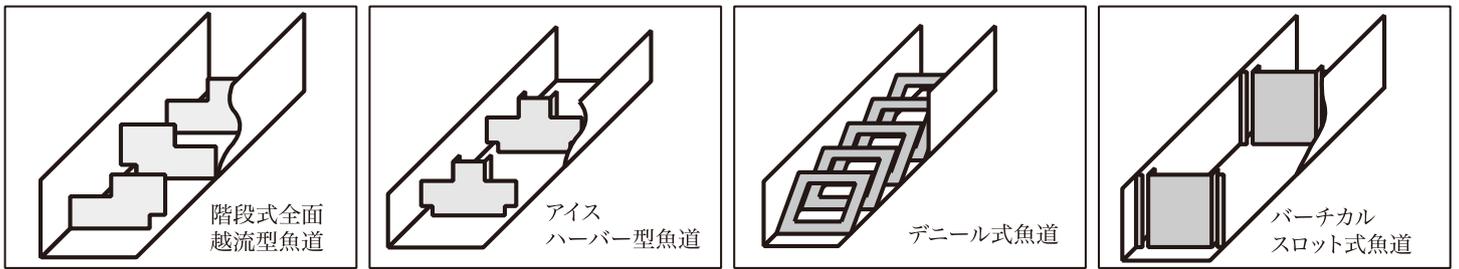
3 魚道タイプ

魚道史を概観するには、幕末まで遡る必要があります。ペリーが長崎に来航(1853)した江戸後期、すでに欧米では魚道の原初である「粗石付き斜面式」魚道が設置されたことが分かります(ダム水源地環境整備センター編『魚道の設計』1991年、pp38~65)。その後、コンクリート工学の発達や魚道研究の成果を取り入れ、「アイスバータイプ」などのプール付き魚道に至ったようです。

日本の魚道は、欧米式の魚道を追随する形で導入されました。先発魚道に工夫を加え発展してきましたが、現在は欧米と同じようにプール付きのコ

表-1 倶登山川水系の魚道一覧

魚道No	設置河川	落差高(m)	魚道下幅(m)	魚道側面勾配	魚道タイプ
1号	倶登山川	0.7	3.0	直立	セットバック・ハーフコーン
2号	倶登山川	1.5	3.0	1:1.5	セットバック・斜路玉石張り
3号	倶登山川	1.5	3.0	1:1.5	セットバック・斜路玉石張り
5号	X川	1.0	1.0	直立	セットバック・斜路玉石張り
4号	倶登山川	1.1	1.5	1:2.4~1:0	セットバック・斜路玉石張り



従来の魚道タイプ

ンクリート製魚道タイプが多いようです。

ただし近年の北海道の魚道に限っては、安田陽一・日本大学教授(工学博士)が発案された「台形魚道」が、北海道水産林務部・建設部・農政部監修の『魚道ガイドライン』(2011)で、魚道の中核として位置づけられましたので、コンクリート製台形魚道タイプが北海道では多くなるでしょう。台形魚道は、魚道のプールがすり鉢形状で台形の隔壁を越流した流水がプール内の土砂を廃砂する構造と言われています。

さて、俱登山川の魚道はプール付きコンクリート製ではなく、魚道の原初タイプである「粗石付き斜面式」に似た「斜路型玉石張り」としました。なぜプール無しの魚道にしたのか、その要点を列記しておきます。

一つは、(私も含めた)オビラメの会員が、既往の魚道機能効果を疑問視していたこと。

二つ目は、遊泳魚種すべてが遡上

降下できること(できるならフクドジョウ・ハナカジカなども)。

三つ目は、既存施設に付け足すのではなく、既存施設を撤去する指向をもった魚道が望ましいと考えたこと。

四つ目は、魚の上り下り機能を重視しつつ、できるだけ安価な魚道にすること。限りある事業費の中で1基1基の建設費を抑制し、代わりにできるだけ多くの魚道を設置できるようにと願いました。

五つ目は、魚道の機能をモニタリング・検証・フィードバック(簡単な修正作業)ができる魚道が望ましいこと。

以上の五つの要求事項から、既設落差工コンクリートの一部を開削した、セットバック「斜路玉石張り」魚道になりました。

斜路玉石張り」とは、玉石を中詰めにしたカゴで斜路水路をつくり、カゴの上部鉄線にワイヤーと連結した玉石を張りつけたものです。上記の五つの要求事項をほぼ満たしていますが、課

題は耐久性(耐用年数)です。

河川工作物の法定耐用年数は、鉄筋コンクリートで50年、無筋コンクリートは30年とされています(財務省「減価償却資産の耐用年数等に関する省令」附則財務省令第81号、別表第1構造物)。いっぽう、今回「斜路型玉石張り」魚道に使用した「鉄線カゴ」の耐用年数は30年です(国交省「鉄線籠型護岸の設計・施工技術基準(案)」2009年)。このことから、当該魚道は、完成からおおむね30年間にわたって機能することが要求されるのです。

今から30年後というと、「オビラメ復活30年計画」(2001年～2030年)で「オビラメの会」が目指している解散年(2030年)から、さらに10年後です。そのころの尻別川にはオビラメが普通に生息しているイメージを浮かべながら、ぜひ魚道をときどき観察してください。

魚道完成	備考
2008/03/01	2010年水叩き玉石堰上改良
2009/02/01	
2009/02/01	2010年にめくれ修理
2010/03/01	
2011/02/01	帯工水叩き改良(予定)



4号落差工に完成したセットバック斜路玉石張り側面傾斜タイプ魚道。2011年10月15日撮影。

「オビラメの会」の2010年度決算

10年6月～11年5月、11年6月26日通常総会で承認。単位:円

前期繰越①	1,315,212		
収入	126,000	会費	2000円×63
	33,000	寄付	山本様、川村様
	6,000	広告	まぐる屋十割様
	1,597,240	助成金	日野自動車グリーンファンド 600,000
			セブンイレブンみどりの基金 557,480
			パタゴニアフットウエア各社様 439,760
	101	利息	
	1,762,341	収入合計②	

支出③	1,197,135		
運営活動費	81,544	6月	総会費、会報作成費、HP管理費
(内訳)	255,800	7月	モニタリング、飼育池管理費
	36,680	8月	会報作成・発送費、飼育池餌代
	12,600	9月	飼育池餌代、切手代
	37,133	10月	会議打合せ交通費
	72,500	11月	モニタリング
	208,680	12月	池借上料、飼育池管理費
	47,070	2月	風土館講座交通費、会議
	52,748	3月	風土館講座打合せ、札幌ミニシンポジウム
	53,470	4月	風土館講座資料コピー、会報作成・発送
	338,910	5月	飼育池管理費、追加会報代、産卵河川監視

差引き計	1,880,418	①+②-③
------	-----------	-------

オビラメの会役員名簿

会長	草島清作	理事	菅原俊宏
事務局長	吉岡俊彦		山根敏夫
事務局長次長	鈴木則行	幹事	河野裕司
会計	沼田雄一		城座研一
理事	山本契		平田剛士
	藤盛聡	会計監査	加藤清三
	鈴木芳房		山本契
	玉井秀樹		

「オビラメの会」の2011年度予算

11年6月～12年5月、11年6月26日通常総会で決定。単位:円

収入	会費	200,000	100人@2000円
	広告	6,000	
	助成	0	
	寄付	0	
	繰越	1,880,418	
	利息	100	
収入合計A		2,086,518	

支出

事業費	飼育管理	500,000	
	新規飼育池造成	0	助成金申請
	新規飼育池候補地調査	100,000	
	放流魚モニタリング	250,000	
	稚魚飼育と放流会	50,000	
	放流魚情報要請活動	10,000	
	自然遡上河川保護・監視活動	500,000	
	魚道機能モニタリング	50,000	
	各機関との協議	10,000	
	新たな再導入河川の探索	50,000	
	勉強会(3回)	30,000	
	札幌ミニシンポ	30,000	
	ニュースレター印刷	70,000	
	ウェブサイト	1,200	
	その他	10,000	
事業費計		1,661,200	
管理費	会議費	100,000	
	交通費	100,000	
	交際費	20,000	
	食糧費	100,000	
	通信費	30,000	
	雑費	75,318	
管理費計		425,318	
支出合計B		2,086,518	

次期繰越金C	0	A-B
--------	---	-----

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えて、右の郵便口座にお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局まで

オビラメの会ニュースレター 第37号(2012年2月発行)

OBIRAME Newsletter No.37 Feb. 2012

- 発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
- 編集 ■ 平田剛士
- 印刷 ■ (株)須田製版 (北海道滝川市栄町3-5-16)
- 発送 ■ 吉岡俊彦
- 郵便振替 ■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
- オビラメの会事務局 ■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「まぐる屋十割」内
吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
copyright 2001-2011 Obirame Restoration Group
http://obirame.fan.coocan.jp/

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

まぐる屋十割

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 0136-44-2472
Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp